
possess!on

春夏 愁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

possession

【Nコード】

N2488Y

【作者名】

春夏 愁

【あらすじ】

当たり前のように争いが溢れ、醜い感情が蔓延る、汚い世界。何処の国も自国の主権を守る為、新たな兵器を開発しては、続々と前線へ送り込んでいた。

そして。

エモーショナルシステム。

そう呼ばれる物の導入により、戦況は大きく変わりつつあった――。

人間と同じような感情を与えられたが、人間ではない。
どんなに望んでも、人間と一緒ににはなれない。

そんな悩みを抱える、
アーマードガジェット

新型AGナナと、

守銭奴整備士ナフィスを巡る小さな物語。

戦争に勝つ為に与えられた、感情という名のデータ。
それは新たな出会いの始まりでもあった。

act..00 チュートリアル

ザザザ——…

………

ホントニ

スキダッタんだ

ダレヨリモ

ダレヨリモ…

ザザ……

——…ザサ——…

※
※
※

「主^{あるじ}、軌道を大きく外れております」

天気は快晴。風は無し。下には砂漠が広がり、前には雲が遠くに浮かんでいるだけ。欠伸が出そうになるぜ。全く。

「あん？ てめえは誰に口を聞いているんだ？」

舌打ちをしながら、操縦桿を引いてやると、機体は高度を上げ、更にスピードを増す。素直じゃねえか。思わず、にやりと口が緩む。

「私は主^{あるじ}の命令により、通信系回路を全て断つてから1時間となります。以後私に我が軍からのコンタクト要請は20を数えております。我々の任務は――」

「うるせーな」

こいつはいつもそうだ。頭ごなしに説教ばかり。新型の良いAIを積んでもらって、人間的になったかのような口の聞き方をしやがる。

何がエモーションナルシステムだ。何が感情だ。心だ。

コイツら兵器に感情なんて不必要だ。あっても人間様を困らすだけなのにな。

科学者の考えることは、意味がわからねーぜ、全く。

「あんなクソみたいな任務はクズでも出来る。それより久しぶりの外回りなんだ。思いっきり飛ばないと損だぜ」

「しかし主――」
あるじ

「うるせーな。もっと楽しませろよ。新型クン」

「……心得ました。後5分30秒でリドニア帝国領域に突入します」

※

「主」
あるじ

「なんだ、もうてめえは喋るつつってるだろ」

せっかく人様が気持ち良く飛んでいるというのに、機体が喋ったら萎えるだろうが。

室内訓練ばかりの毎日に飽き飽きしていたんだ。今回の任務不履行、パイロット憲章違反も親父がなんとかしてくれるだろう。

こんな機会を与えていただいた親父様には感謝だな。気持ちが良過ぎる。

「主、あるじ私にもう燃料がありません。今から学園都市へ引き返す程度しか――」

「ちい。もう終わりかよ。つまんね。非常用は？」

「……」

「答えろよ」

「ありますが、しかしあくまで予備であります」

「まだ大丈夫だな！ よし。もっとスピードを出せ」

風の音が変わり、高揚感が沸き起こる。

やはり、ロボットは人間には逆らえない。そうプログラミングされてるからだ。

我が連合王国軍が作り出した“アーマードガジェットAG”は世界各国から 高い評価を受けている。機体性能も良く、従順。訓練次第で、いかようにもなる。

コイツはいい機体だぜ。

人間様に歯向かうことなど出来ないのだから。

「主！あるじ！」

突然、機内にヤツの声が響く。

「喋んなってん——あ？」

薄紫色のフロントガラスの先に、大きな砂柱が上がっているのが見えた。

思わず計器を確認し、上空1km近くだと確認する。

いくら低空で飛んでいたにせよ、こんな大きな砂柱見たことないぜ。

「全力で避ける！」

「承知」

ヤツは言う通りに急に機体を右へと傾け、進路を変える。

リドアニア砂漠。世界最大の砂漠か。こんな黄土色の中に飲み込まれたら、骨になっても帰って来れないぜ。

下の様子を確認しながら、新たな進路を取る。

砂柱を避けたと思った瞬間、再び目の前に砂柱が立ち上った。

「避ける！」

「このままでは不可能です。変形許可を」

「ちい！！ 変形！！」

機体は両翼を持つ飛行機のような形態から、四肢を持つロボット形態へと変形した。

これが連合王国軍が誇るA Gの特徴の一つ、多段変形である。

「主！^{あるじ} これはナツメオロチの変異種で――」

「黙れ黙れ黙れ！ 私の飛行を邪魔した者には有無を言わず、鉄槌を与えてやる！！」

背中に装備されている大剣を両手に構え、砂柱に切りかかる。

この大剣は、我々人類が発見した中で最も硬いリキテニウム合金で作られ、敵の兵器を薙ぎ倒してきた。

倒せる自信があった。

が、砂柱は切られた瞬間勢いを無くし、地上へと消え、空が残る。仕留めた感触もない。

「主！^{あるじ}！」

声がした瞬間、四方八方から機体に味わったことの無い衝撃が走った。

なんと、上空から砂の礫が降り注いでいるのだ。

砂というよりは、砂を固めた岩に近いかもしれない。

始めは最硬度を誇る剣で弾いていたものの、余り量になす術もなく、機体は弱々しい声を出しながらリドニア砂漠へと落下する。

「おい！ 空を飛ぶんだ！！」

貴様はA Gの分際で、パイロットの命令が聞けないのか。

飛べ！ 早くこのテリトリーから脱出するんだ！！

新型のくせに！ A Gのくせに！！

パイロットの命令も虚しく、砂漠へと墜落し、質量に比例した激しい砂埃が舞い上がる。そして、ガジェットはよろよろと立ち上がろうとする。

先ほどの攻撃により、ジェット噴射孔や翼をやられ、飛行の見込みはゼロだとモニターが告げる。

「あ、主……わ、わたしは」

「脱出する」

「……………！」

使えない、弱いガジェットには興味が無い。貴様を新型と聞いて今まで訓練してきたが、ここまでのようだな。

「脱出ポットに非常用燃料は？」

「……帰還可能量はあります」

「ならば良い」

そして満身創痍の機体は、背後から硬度のある砂の縄にきりきりと締め付けられ、苦しそうな声を上げる。

そして、砂によって身動きの取れないように固められてゆく。

「また回収に来てやるよ。お前より強いガジェットがいなかったらな」

「……ル、ルドア様」

機体は切なそうな声を出す。

兵器に感情など要らないな、と強く思う。通常ならもつと機械的に反撃を試みる 場面ではないのか、とこの女々しい機体にツツコミたくなる。

「主……、な、ナツメオロチは機械類のオイルを好みます……。私が注意を逸らしますので、その隙にお逃げ下さい……」

「了解了解」

脱出の準備を整え、脱出ポットのベルトを占め直す。

「主。^{あるじ} お元気で」

ガジェットが最後の言葉を告げると、激しく力を入れ始めた。

ナツメオロチが機械オイルを抽出しやすいように、砂で固められた身体を、無理に動かそうとしているのだ。

しかし、ナツメオロチによって固められた砂は素晴らしい強度を持っているので、その歪みで機体がミシミシと音を立て始めた。

そして遂にその軋みに耐えきれなくなった右腕が宙に舞い、オイルが周りに飛び散る。

その一瞬に砂による拘束が緩み、脱出ポットの発射スイッチが押す。

いや、押された。

おかしい話だ。

勢い良く発射されたポットであったが、こちらも機械であり、その上好物の燃料とあって、ナツメオロチの砂が追いかけ始めたのだ。

「おいおいおい」

足止めも出来ないのか、あの鉄クズは。

俺様がこの砂漠を彷徨う結果となったら、親父にあのクズ型番を永久に開発停止にさせよう。二度と、こんなクズに出会わぬように。

「貴様の相手は私だろう……」

脱出ポットにスピーカーからヤツの声が聞こえた。ヤツが微かに呟くと、ガジェットは左手に持った大剣で、自らの腹部を突き刺したのだ。

突き抜ける大剣。飛び散る燃料。砂塵に染みが残る。

脱出ポットを追いかけていた砂も慌てて引き返し、白い機体を包み込んでいった。

遠ざかる砂山。沈む白。

こうして、白銀の機体は無限の砂の中へと消えていったのである。

a c t .. 0 0 チュートリアル（後書き）

ただ、「あるじ」と呼ばせたかっただけです。

act..01 魂との出会い

「主。私は……」

言いたいことが次々と沸き上がる。これが醜い感情なのだろうか？
“正義の心”をプログラミングされている私に、このようなことはあってはならない。

「いや。私は人間ではないのだ。望みなどない……」

兵器として生まれ、感情を渡された時、私は嬉しかったのだ。

人間と共に感情を分かち合うことが出来るだろう、と。

そして今、主を守り、この砂漠の中で死にゆくことを誇りに思う。

私ハ……誇りに思う……
あるじ……

※※※

「で！ 聞けよホムたん！ すっげえの見つけたんだ！！」

……ホム……たん？

私のメモリの中には存在しない言葉だ。人物名だろうか。

私は今何処にいるのだろう。

視覚センサーが通常に作動する。声の主は、オレンジ色のツナギを着た女性に違いない。

ここは……洞窟……だろうか。岩肌に囲まれていることが認識できる。

「画像送るから。うんうん。今、ブラマのオークションにも出品してるんだ。また下取りに来いよな。ハハ。じゃあね」

ブラマとはブラックマーケット、つまりは闇市場のことだろうか。いやまだ判断するのは早い。

あれこれ思案していると、女性は黒い受話器を置き、こちらへと振り返る。

薄茶色のショートカットの上に大きなゴーグルが乗っており、血色の良い顔が微笑んでいる。

知らない顔だ。

「気が付いた？ ガジェット君」

少し掠れたハスキーな声が私に話し掛ける。
誰の声紋とも一致しない。

「ああ」

「警戒しないで。私はナフィス・ラーディア。リドアニア砂漠の片隅で整備士やっているの。君の名前は？」

ナフィス・ラーディア。

知らない名前だ。帝国の一般人か。

彼女は両手を挙げ、無抵抗だとアピールする。

「私の名前は……」

急にメモリが痛む。なんだろう。この痛みは。過去を思い出すこ

とを妨げているような。

「……私の名前はA G—N型007。人間からはザインと呼ばれていた」

「ふーん君、エモーショナルシステム積んでる？　今、何処か痛まなかった？」

私は首を横に降った。しかし、ナフィスは見透かしたように笑った。

「嘘。絶対嘘。じゃあ、君の下手くそパイロットの名前を教えて」

この女。私の主を馬鹿にした。私の主は一般人に貶められるほど、落ちてはいない。私の主の名前は——。

「私の主の名前は——」
「名前は？」

すると、急に痛みが走る。

頭が割れそうな痛みだ。主の顔や言葉は思い浮かぶのに、声にならない。

「これがメモリロック」

ナフィスは静かに言った。

「メモリロック？」

「そう。エモーショナルシステムを積んでい る機体は諸刃の剣なの。一緒にいる時は楽しいし、パイロットと同調した時は120%の力を出すことが出来る。だけど、敵側の手に渡った際、感情や口車に乗せられて情報をペラペラ喋っちゃ駄目でしょ？ それを未然に防ぐ為、記憶に鍵をかける」

「具体的には？」

ナフィスは私の眼をじっと見ている。彼女の眼は髪と同じ薄茶色だ。

「……それは君の方が判るんじゃない？」

まあ、それもそうか。私自身の問題なのだから、人間の彼女にわかるはずもない。

「どうすればロックは外れるんだ？」

「うーん」

彼女は考え込む。

「私、ガジェットの仕組みは解らないな。多分、パイロットに聞けばいいんじゃない？」

名前を忘れたパイロットが私の主か。なんとも滑稽な話だろうか。いち早く私は帰らなくては……。

何処に？ 私は何処に帰れば良い？

何故。私は……。

……思い出せないのか……。

「ねえ、ガジェット君」

ナフィスが見上げながらこちらを見る。

「君、もう少し此処に居ない？ 帰る場所分らないでしょ？」

帰る場所……か。ぼんやりと分かるような気がするが、靄^{もや}がかかったようにハッキリしない。

なんともどかしい。

いや、誰か迎えにきてくれるのではないだろうか。

どのような経緯でこうなったか、いまいち思い出すことは出来ないが、名も知らぬパイロットが私を探しているはずだ。

「いえ、貴方に迷惑をかける訳にはいきません。私は連合王国軍のA G。帝国とは相容れぬ存在なのですから」

私は帝国軍を倒す為に造られたA G、アーマードガジェットだ。彼女には恩を感じているが、これ以上の迷惑はかけられない。

「結構、堅物なんだ。ナナちゃんは」

「な、ナナ……?」

聞いたこともないような名前と呼ばれ、A I内にスパークが走る。これはなんという感情なのか。とても……、熱い。

だが、楽しそうに笑う彼女を見ると、連合王国軍だとか帝国軍だとか、戦争だとかを忘れてしまいそうになった。

彼女と喋ることが私に新しい影響を与えているに違いない。新しい。楽しい。嬉しい。

「そ。Nの007だからナナ。可愛くていいでしょ。それに」

彼女は茶色の革手袋をはめた手で指さす。

「まだ機体全体の修理が終わってないの。今回は燃料タンクを修理が完了したから、試しに動かしてみただけ」

私は今になって始めて、自らの身体がおかれている状況を確認した。

至るところケーブルが繋がれた自らの身体。リキテニウム合金で造られた外装を取り外され、内部の回路が剥き出しとなっている。

両足のジェット噴射孔もバラバラに分解され、修繕が行われているようだ。

左腕は動かせるようだが、以前に比べて動かすにくい……ように思う。

なにせ以前までは一流のメカニックが、一流の設備を用いて整備をしていたのだろう。このような砂漠の設備士に、同等のメンテナンスを望めないことなど判りきっている。

右腕というと……。

私は右腕を見た瞬間、思考回路が飛んだかと思うほど、それは衝撃的だった。

「み、右腕、が……」

私の指摘に、ナフィスは嬉しそうに頬を染めて答える。

「気付いた？ このナフィス様特製“AT-456砲搭載型右腕”。このAT-456砲というのはね、今は亡きグランディア王国の空中戦艦“ナブデイス”に搭載された誉れ 高い主砲——」

「ちょ、ちょっと待って頂きたい！」

私は思わず声を上げる。

すると、嬉々として語っていたナフィスは、不思議そうな顔をして此方を見ていた。

「わ、私は……！」

私の右腕に装着していた物、それは、度を大きく超えた巨砲だった。

そして、その左右にも3本ずつ砲が備えられ、更に外装とは相容れぬ紫と黒の奇抜なカラーリングが施されていた。

それは誰がどう見てもやり過ぎであり、私自身バランスを保って、立つ自信が無かったのだ。

「私は、中距離剣術型アーマードガジェットとしてプログラミングされ、訓練されてきました。

このような大きな砲は扱えません。それに――」

「それに？」

屈託のない顔が、首をかしげて此方を見ている。

言葉が上手く、上手く言い表す言葉が見つからなくなる。

「それに、私は……」

私のAIが痛む。エモーションナルシステムが痛んでいるのか、メモリロックで痛んでいるのか、物理的ダメージで痛んでいるのか。私には見当もつかない。

「……私は、私など消えるべき存在なのです」

暫くの間、洞窟の間に沈黙が広がる。

この青白い光が満ちる場所は、本当に広い空洞である。AGの私でも入ることが出来るのだから。

先ほどの言葉は、彼女にどのように響いただろう。

この広い空間にどのように反響しただろうか。

「バツカだなー」

ナフィスは先ほどよりも明るい声で言う。

「ナナが消えるべき存在？　なんで？　なんで君が消えなきゃならないの」

ナフィスは両手を広げ、私の話している意味が分からないような素振りをする。

ナフィスはまるで分かっていない。

私を。

そして、アーマードガジェットとして生まれてきた意味を。

音量を上げて、彼女に語り掛ける。

「私は私の主の命令を守れなかった。そして、帝国民の手によりバラバラに解体されていく。このままでは私の機体の極秘機密が外部に洩れて――」

「ナナは消えないよ」

私の声を切り裂く一言。

その言葉は、今まで彼女が放ってきた空気、重みとは一線を画する物である。

空気が、人が、変わった。

私は何故かその雰囲気圧に圧倒されてしまう。

「……何故、では、貴方の手で私を消して下さい。私は存在している価値などもない」

この役立たずのAIを串刺しにして、私の存在を消してしまっただけで済んだ。

主の命令すら守れぬガジェットに、国など護れようか――。

ナフィスは変わらぬ鋭い目付きで此方を一線に見つめ、ゆっくり目を閉じると言葉を吐き出した。

「出来るもんなら、とっくにやってる」

「な、――」

「だけど、君の消えることを望んでいない人がいる。そんな人がいる限り、君は消えない」

私の消滅を望まぬ人間……？

彼女の言葉の意味が解らない。理解することが出来ない。

私の主か？ 私の製造者？

解らない。解らない。

「では、私の誇りはどうなる！ 私は……、私など……」

「……君には誇りなんて要らない。君はガジェット。兵器だ。消えることを誉れを 抱くな。ボロボロに壊れながらも帰還しろ。そんな陳腐な誇りなどの為に、高性能AIを、複雑な感情を棄てるというのなら、私は人間としての君を軽蔑する」

頭が痛い。

何故だ。人間。

私は、そのようにプログラミングされていない。

私は、私は兵器なのだから、軽い軽い手駒の一つなのではないのか。撃破されて当たり前の、時間稼ぎのような、軽い存在ではない

のか。

そう私に教えたのは人間ではないか。

自分の意義に重みが欲しかったら、誇りを持って、と。

私には、私は。

私には、今も存在する意義があるのか。価値はあるのか。

私は、私は――。

「君には存在する価値がある。私には無い、素晴らしい価値――」

彼女は言葉を続ける。

凄く痛い。

彼女の声はとても淋しい響きを持っているような気がする。

私はガジェットで、彼女は人間。

だけど、彼女は冷たい声で言った。“人間としての君”――。私は鋼鉄の塊で、人間ではない。

意味が解らない。

それに、彼女の声が冷たい。

人間である彼女に、この冷たさを望まぬ自分がいる。

彼女のこんな声は聞きたくない。だけど、何故こうなってしまったかが、理解できない。

解らない。解らない。

解らないことだらけで、AIがショートして、焼け付いてしまっ
そうだ。

解が欲しい。解を今すぐインストールして欲しい。

「――ごめん。今、意味わかんないこと言った。ちょっと頭冷やして
てくる」

彼女はそう言い残すと、奥の方の横穴へと消えていってしまった。
何故、彼女が謝るのだろう。

彼女の気持ちを踏みにじっているのは私の方だというのに――。

「姐ちゃんは素直じゃないからな」

突然、声がして私は我に戻る。回りへの警戒意識が低下していた
ようだ。

私は直ぐ様、遠いナフィスの後ろ姿を追い掛けていた視線を真下へと戻し、声の主を探す。

「あれは姐ちゃん流の愛情表現だから気にしちゃ駄目だよ、ナナ」

健康そうに日に焼けた、褐色の肌を持つ少年が、丸椅子に座りながら笑っている。

彼も薄汚れた灰色のツナギを着ていて、手にはスパナのような物が見えた。

「君は……?」

「あ? 僕? 僕はね、カリマっていうの。この工場主の孫」

はじめまして、と白い歯を見せる彼は愛嬌のある顔をしている。薄く透かれた黒い髪は、概ね綺麗に整えられているが、右側の寝癖だけが風で揺れている。彼は身長からみて、10歳程だろうか。黒い目が大きく、とても幼く見える。

「では、ナフィスとは姉弟なのか?」

「えっと、血は繋がってないけど、僕らは兄弟だよ。ナフィス姐が兄で、僕が弟。ナフィス姐は頼りになる強い兄貴さ」

カリマが力強く言う。

“強い兄貴”か。

冗談にせよ、あながち間違った表現ではないかもしれない。

彼女はとても男勝りな面がある。最初はそれを必死に隠そうとしていたような気がする。

「ねえーねえー、ナナはガジェットの新型なの？ 僕、帝国軍のギミックと、めっちゃうちゃ古い旧型ガジェットしか見たことなくて…」

カリマが椅子を揺らしながら子供っぽく尋ねる。

ギミックというのは、帝国軍側が開発しているAGだと聞いたことがあった。

アーマードギミック。

連合王国軍側と違い、機能特化が激しく、合理性に富み、扱いが難しいと聞く。しかし選り抜かれたパイロットの手にかかれば、一晩で一国を落とすことも容易だ、という話を教えられた。

私自身、戦場での戦闘経験が無いので、訓練の際、仮想敵として写し出された半透明なホログラフ兵しか知らないが。

「だけど、僕見直したなー。ガジェットって芋っぽくて、ダサダサなイメージあったけど、ナナはシャープで、イケメンだもんね」

……芋っぽくて、ダサダサ？

……イケ…メン？

上手く言語を理解することが出来ない。帝国の公用語を翻訳することは可能だと 思っていたのだが、どうやらそれは思い過ぎし
だったようだ。

とりあえず、誉められていると受け取って良いのだろうか。

「姐ちゃんもね、さっきは真顔で『軽蔑する！』なんてナナに言っ
てたけど、ホントは君のこと大好きなんだと思う」

ナフィスの顔や声色を真似て、大袈裟に喋るカリマの話は、とて
も明るくて、聞いていて楽しい。

AIが温かくなる。

私が、変わっていく。

そんな気がする。

「だって、ナナが来てからテンション可笑しいもん。『綺麗……』
とか譫言うわごとのように呟きながら、君の身体の砂落としてたし」

“綺麗”か。

今まで自分で意識をしたことが無かったので、そのような指摘
は意外だった。自分分は兵器で、そのようなことを省みる必要を感
じられ無かったから。

それに自分にプログラミングされている“綺麗”と、彼ら人間の感じる“綺麗”に微妙な差異があることに気付いた。

——私は兵器を美しく感じる心など持ち合わせてはいない。

「ちなみに姐ちゃんに愛されなかった機体は、あぁなります」

カリマが洞窟の一番薄暗い場所を指差す。そこには大量の鉄屑が山の形を成していた。

判別出来るのは、ガジェットやギミック、更には一般機械やワークボットまであり、分解され、貴重なパーツを取り除かれた状態であることが分かった。

彼らはこの後、鉄屑屋に引き取られるのを待つばかりという。

「ここら辺は貧しいから、古いのを直して使い続けるより、解体して売ったお金を足しに新品を買ったほうが、よっぽど効率がいいんだ」

「しかし解体は……」

解体して横流しは違法だ。

大抵、闇市場に流れる違法パーツや機体は、賊の手足となり、治安悪化に繋がる。

それを重くみた世界各国の首脳は、国際的に非合法的解体業務を全面的に禁止した。

それが10年以上前になるが、一向に盗賊被害が減らないという。

「違法？ そんなこと知ってる。だけどそんなルール、中央のお偉いさんが僕らの事情も知らずに勝手に決めただけ。僕らが生きていく為には、絶対必要なことなんだよ」

「カリマ殿はおいくつなのですか」

「僕？ 僕はねえ、今年で10かなあ」

10歳の男の子が、このようなことを言うものなのか。
私を知る10歳は、まだまだ親に甘えたい年頃だと思っていた。
しかし、世界は広がったようだ。

私を持っている知識が、通用しない。

ただ、カリマは目を輝かせながら此方を見上げている。

「ねえ、ナナ。僕は君のこと、もっともっともっと、知りたいんだ！
！ どんなどころから来たとか、他にどんなガジェットがあったとか、どんな食べ物 が好きだとか……。ねえ、ずっとここに居ることは出来ないの？」

しかし、好奇心旺盛で、新しい物に興味津々な所は万国共通のようだ。このようなカリマは年相応に感じられた。

「その申し出は嬉しいが、私は此処に留まり続けることは出来ない。私は連合王国軍のガジェットであるから」

「じゃあさじゃあさ。直るまでここに居てよ。んでね、君に乗ってみたいなあー。乗ってねー砂漠を走り回るの！」

「……約束しよう」

「やった！　ありがとう！！　ナナ大好きー」

私は兵器だ。

なのに、此処の人々は私にそれ以外の何かを期待している。それが何なのか、私自身解らないが、心地良いので私は余り考えないことにする。

主、今貴方は、何をしているのだろう。

今の私の状態を見たら、笑うだろうか。怒るのだろうか。

それでも私は、主の無事だけを祈っている。

届け。
名も知らぬ、主へ――。

a c t : 0 1 魂との出会い（後書き）

なんか改行がおかしい感じがします。
パソコンのメモ帳が悪いんだろうか……。

act..02 彼女の誤算

「カリマー、ケーブル抜いた？」

「大丈夫だよ、ねえちゃん」

「うおっし！　じゃあ、そろそろ動いてくれるかな」

遠い意識の先で、声がした。

霞む視界、聞き覚えのある姉弟の声。

私は再び燃料が切れて眠っていたようだ。

この冷たい岩肌にもたれながら、私はどれほどの間眠っていたのだろうか。

電流が脳内回路を走り抜け、私の目覚めを告げる。

「――おはよう。気分はどう？」

ハスキーのかかった優しい声が私に話掛ける。

私は視覚センサーを作動させ、オレンジ色のツナギを着たナフィ

スと、灰色のツナギを着たカリマを確認した。

「おはようございます。気分は悪くない。……ありがとうございます、ナフィス殿。ありがとう、カリマ殿」

私は右手を胸の前に当て、頭を下げる。すると、私はある事実に気付いた。

右腕が巨大な砲ではなく、普通であるということに。

以前の私が身に付けていたパーツと違う上、型も古そうだが、精一杯私に合うようにチューンしてある。

その心遣いに気付き、私はナフィスと目を合わせる。

「わ、私はあっちの腕の方が、絶対的にカッコイイと思ったんだけど、カリマが断固拒否するから――」

「姐ちゃんは壊滅的にセンスが無いからねー」

恥ずかしそうに目を背けるナフィスに、楽しそうに笑うカリマ。その光景は、まるで兄弟そのものに見えた。彼らにどのような過去や経緯があって、兄弟になったが知らないが、本物の兄弟の様で不思議とAIが温かくなる。

「ナフィス殿、感謝する」

私は再び頭を下げた。

「……うーん。前から気になってたんだけどさ、やっぱり堅いよね」
「堅い堅い」

同意を求められたカリマは、うんうんとうなずく。

そして、姉弟二人が不満そうに私を見上げる。私の礼の表し方に不満があったのだろうか。非礼は謝るべき問題である。

「ナフィス殿、私は何か――」

「堅い！」

ナフィスが茶色い革手袋を付けた手で、私を指差す。

その大きな声は、洞窟中を飛び回り、盛大に反響した。

私は一瞬、何のことか解らず、思考回路が停止する。

意味が解らない。私は今までそのようなことを言われた経験がないので、どう反応していいかが解らない。

「何が“ナフィス殿”だよ！ ナナに尊敬されるほど、私は偉くないって」

「そーそー」

カリマは隣で、腕を組み、頷いている。

「私達は、君の主じあるじやないんだからさ、もっと、ざっくばらんな関係で行こうよ、ね？」

どうしてだろう。

彼女の言葉には、磁力があるみたいに引き寄せられる。

今までこのような経験が無いから、新鮮なだけだろうか。

彼女の言葉が染み込む。

いや、ただ流されているだけなのか。

「しかし、ナフィス殿――」

「あー！！ また言った。罰として、私の一日パシリ！」

「な……！！」

「あ！ ねえちゃんだけズルい！！」

カリマが頬を膨らまし、ナフィスの袖を引っ張る。

……私が、パシリ？

“使い走り”のことだろうか。しかし、私は一日も早く主の所へ帰らねばならない。

私はアーマードガジェット。

王国の敵を吹き払い、主を守る為に造られた。

いつまでも帝国に留まる理由などない。帰る場所が解らなくても、連合王国領まで帰ることが出来たなら、なんとかなるだろう。

——ただ。

私は、二人の顔色を伺う。

見ると二人は私の下で、仲良く取っ組み合いを始めていた。私を巡ってというのだから、可笑しな話である。

——彼らの恩に着たことを、忘れた訳ではない。

……このまま何もせず立ち去るのは、不義に当たるのではないだろうか。

もう、二度と会えないのかもしれないのだから。

「わかりました。私も何もせず、立ち去るということに、少々問題を感じていました。なので、2・3日という短い間だけですが、お手伝いをさせて頂きたいと思います」

二人が掴み合いを止め、此方を見上げる。ナフィスも二十歳ほどの女性であるのにも関わらず、カリマのいい相手になっているようだ。

精神年齢が低いということに違いないだろう。
思わず、笑みが溢れそうになる。

「よろしいですか？ ……ナフィス、カリマ」

私は先ほど指摘された点をゆっくり実践してみる。

まだ慣れてないせいかな、何処かぎこちない。

ただ、二人は見るからに顔が明るくなり、瞳を輝かせながら、声を揃えて言う。

「よろしいですとも！！」

二人の声に洞窟が震え、細かい砂が落ちてきた。

——なんだろう。

以前の環境とはまるで違う気がする。よく思い出せなくて、上手く表現出来ないのだが、以前はこんな気持ちにはならなかった。

この感情が、必ずしも良いものであるとは思わないが、私のAIを更に豊かな物にしていると思う。

そう、思いたい。

「しかし、ナナは大きいねー。見上げなきゃ顔が見えないや。身長はどれくらいあるの？」

「今の状態だと5mだといわれています」

私は白いボディを見渡す。黒い関節部分には砂漠対策の防塵処理が手軽ながらも行われていた。これで動きが鈍ることは少なくなるだろう。私は心からナフィスに感謝した。

足元はアーマードガジェット伝統の台形処理である。下に行けば行くほど、広がっていく様は、安定性と共に機動性を求めたという。人間のふくらはぎに当たる部分は橙色で装飾され、私が空を飛ぶ為には必要な物だ。

また肩の装甲や、頭の“ツノ”（とナフィスが呼ぶ物）が一部欠けてしまっているようだが、装飾の一部なので、影響は殆ど無いだろう。

「うーん……。じゃあ、こん中はあんまり案内できないや」

カリマが残念そうな顔をし、ナフィスの顔を見る。

すると、彼女は、出来る所だけでいーじゃん、と笑った。そして、
「ちょっと、奥片付けてくるわ」と言い残すと、洞窟の奥へと行ってしまった。

「うーん、この部屋入れるかな……」

カリマは地面に地図を描きながら、考えている。
どうやら、私の大きさがネックらしい。

「それならば問題ありませんよ」

私は声を掛ける。

カリマが顔を上げると、驚いたように腰を抜かし、口をパクパク
させながら、手をバタつかせた。
そして、大声を上げる。

「ね、ねえーちゃん！！ ナナが……」

カリマの叫び声に驚いて、ナフィスが様子を伺いに走ってやって

きた。

ナフィスも動きが止まり、私を凝視する。

声に出さなくても、驚いている様子がわかる。

「……待て待て。今、私の中で何が起こったのかが、理解出来ない」

彼女は頭を抑え、下を向く。

大きな息を一つ吐いて、間を置いた。

「学の無い私でも理解出来るよう、わかりやすく説明してくれ。
ナナ」

ナフィスは頭を上げ、一言一言ゆっくりと続けた。そして、こちらを見る。

視線の高さが彼女と同じになると、目が大きいことがよくわかった。

それもととても透き通った茶色だ。

「いえナフィス、私は普通に変形しただけです」

私は身体の中に仕舞っていた肌色の手袋を取り出し、両手にはめる。

私の答えに、ナフィスは顔を歪めた。カリマは横でうんうん頷いている。

私ははめた手袋をナフィスに見せる。手相や指紋が入った特注品だ。

「……ま、まあ、連合軍お得意の変形だったって……、飛行機がロボットになったり、四輪車になったり、戦車になったり——」

ナフィスは困ったような顔をしながら、指折り数えていく。隣でカリマも真似して数えている。

「しかし、人型は聞いたことがない！」

しかもこんな立派な皮膚までついて、と私の顔に詰め寄る。

彼女も整備士なのだから、見たことの無い技術は気になるのだろうか。

私のことがとても気になるように見える。

私は自分に関する情報を記憶媒体から検索した。“メモリロック”という物が掛かっているのだ。それほどの重要な機密は出てこないはずだ。

「ナフィスは“capsule——超重力式圧縮カプセル”をご存知ですか？」

「まさか……」

ナフィスは息を飲む。

しかし、次の瞬間彼女は首を振る。

「いいや、有り得ない。あれはただの箱だ。大きな荷物を圧縮してカプセル錠剤みたいにするだけ。それがA Iと連動するなんて……」

「私もよく仕組みはわかりませんが、その技術を応用して、私は作られました。まだ途中なので人工皮膚は顔にしか貼られてはいませんが」

彼女が望む答えを言えたかわからないが、私の言えるすべてを言っただけだ。

私も詳しくはよく解らない。メモリロックがそれを妨げているから。

「……つまり、大きな従来の機体をカプセル圧縮して収納し、人型カプセルは機体のA Iと連動している、と。……天才だな、考えたヤツ」

ナフィスはボソリと呟く。

「だから、連合王国が今までケツタイな四肢形態に拘ってきたんだな」

「……どういう意味ですか？」

何か彼女の言葉に引かかった。何か初めて彼女の敵意に触れた気がした。

彼女も帝国民なのだ。何も彼女が連合王国に怨みを抱えていてもおかしくはない。

両国は現在休戦状態にはあるが、緊張状態であることは変わりはない。過去の出来事を考えれば、怨み妬みの一つや二つあるぐらいが普通だろう。

——いや、それは考え過ぎだろうか。

だから、私のAIは説教臭いやら、堅いやら言われるのか。

ナフィスはパッと顔を上げ、此方を見る。

「見たまんま。服を着てしまえば、人間と全く区別が付かないじゃん——！！　　ってか、服——！　カリマ！　じいちゃんの服——！」

ナフィスは突然、気付いたように顔を赤らめ、手で覆った。そして、背中を向けて、走り去ってしまった。

——「えっとね、ナナ。姐ちゃん、あんまり経験ないからさ、気にしちゃ駄目だよ」

「経験？」

カリマがだぼだぼの色褪せた灰色のズボンとシャツを差し出しながら、話しかける。

「そ！ 姐ちゃんはね、ああ見えてピュアで、恥ずかしがりやさんだから、あんまり男の…裸を…、い、いや、人と喋るのが得意じゃないんだって！ “嫌い” って訳じゃないらしいんだけど…」

「では、私はこのままで居ない方がいいのだろうか？」

私は自らの姿を見回した。

ナフィスを怖がらせるつもりは無いし、ロボット型の方がいいというならその方がいい。

ナフィスに嫌われてしまったら元も子も無い。

「ううん、むしろ人型でいて。姐ちゃん初恋への第一歩！ なんちやって……」

カリマは笑った。

カリマはカリマは色々と考えているようだ。やっぱり微笑ましい。

「承知した、カリマ。私も出来るだけの努力はしてみる」

詳しいことは知らないが、このままでいいらしい。

私は彼から渡された服を着ると、ナフィスの後を追いつけた。

肩の突起物がシャツに収まり難いのか、破れてしまっている。完全に人型といかないのは、まだまだ改良の予知はありそうである。

私の眼に内蔵された熱探査センサーでナフィスの居場所を探す。

※

「ナ、ナフィス、入ってもいいですか？」

赤い砂で出来た洞窟の先に、ちょっとした広い空間があるようだ。扉はないので、中の様子は少し判る。

部品やらで散らかっている。恐らく、部屋全体が。

「どうぞ」

私は慣れない言葉使いを駆使して、何度も言い直す。

何故、敬語は駄目なのだろう。敬語でなければいけないと思いつ

けて来たのだが。

私は人間の道具だから。

彼女は何を考えているのか、見当がつかない。

「どうぞ。散らかってしてるけど」

入ると左右に膨らんだ構造になっており、右手には機械やら部品が広がる作業台、左手奥にはナフィスが座るイス、そしてパソコン、壁には紙が貼り付けてあった。アイドルのような写真も貼っている。

私はナフィスの傍に寄ると、彼女は大きな布を広げ、裁縫をしているように見えた。

「何をしているんで……だ？」

やっぱり、変だ。上手くないかな。音声に変に途切れた。口を塞いで、もう一度言い直す。

「裁縫。あんたの砂避けにロープを作ろうかと思って。それにはフールドが絶対いるし……」

「……何故フールド、を？ どうして……」

一度、ナフィスが悩むように彼女の手が止まる。そして、小さな声が続く。

「……えっと一度、村に連れて行きたいな、って思ったから。でも、今のままじゃ絶対無理だから」

彼女は机の引き出しから、くすんでしまった手鏡を取り出し、私に向ける。

鏡にはカップセル姿の、私の顔が写し出されていた。

連合王国では一般的な白い肌に、少し明るい茶色の髪。瞳は緑色であることがろうじて判る。

そして、耳には……。

「耳にこんなデツかい、ヘッドホンみたいな白いヤツがある奴、こちらでは見かけない。隠さなきゃ、絶対村には入れない」

この彼女の言う白いヤツには、センサー類の殆どが詰め込まれている。これ無くしては、私は外界の状況を伺い知ることが出来ない。

ナフィスの方へと視線を戻すと、彼女は薄汚れた布を一針一針縫っている。慣れた手付きのようだが、これでは時間がかかりそうだし、私なら出来るかもしれない。

「ナフィス、このコンピューターは外部ネットワークに接続されていますか？」

私の問いに彼女は首をかしげていたが、小さく笑いながら頷いた。

「では、ちょっと借りてもいいですか」

自分の肘から手首に掛けて人差し指でなぞると、黒いコードが浮き上がってくる。

そのコードの先は、コンピューターの外部端子穴に応じて先端の形状を自由に変えることが出来る。そして、好きな端子に差し込め、簡単にアクセスすることが出来た。

私は素早くコードを引き伸ばし、散らかった机に置かれていたコンピューターにアクセスする。

私はこの古いコンピューターを通じて、様々ネットワークから情報を集める。

「……」

広い電脳世界から裁縫関係の情報を抜き出し、知識をインストールする。

そして道具さえ揃っていれば、なんだって出来る自信があった。人間よりも早く、的確に。

「ナフィス、貸して」

私はネットワーク上から型紙を探しだし、彼女の作りかけた物と重ね合わせ、適切なよう無駄の無いよう作り上げていく。

針を持つのは、多分初めての経験だが、使い方は情報が教えてくれる。

便利ではあるが、人間ではあり得ない力だと、痛感する。

「うわー、凄い！ 早い！ 綺麗！ ナナ、凄い！！ 凄すぎる。もしかして家庭用にもイけるんじゃない？ わぁ、凄いなあ……」

ナフィスは目を輝かせながら、私の手元に覗き込む。

私は軍用AGであり、この機能はこんな裁縫を行う為に開発された物ではない。血の通っていない手を見て思う。

裁縫をする為ではない、戦争の為なのだ――。

私は入ってきた情報を整理し、プラグから引き抜く。

私が止まっていた間の世界情勢、経済状況、ここの地理的座標、

天気予報、治安、そして――。

私はナフィスの方へと顔を向けた。

「ナフィス、私は貴女を信じてもいいんですよね？」

「んー？ どゆこと？」

ナフィスは首をかしげ、不思議そうに私を見る。

彼女の目は深い。

よく分からない、と言った方がいいのかもしれない。

「……いえ、なんでもない」

「ふーん、変なの」

すると、彼女は私の手からローブを奪い、私の肩にかける。

「オツケェ！ ばっちり！ へへへ」

言えなかった。

ナフィスが私に笑いかけ、屈託のない目で私を見るのだ。

私は彼女に笑みを返し、立ち上がる。

信じたくなかった、という感情が渦巻き、どう対処するべきか、という意味の無いトラブルシューティングが何度も行われている頭の中。

私はやはり出来損ないAGなのかもしれない。

私は一人そう思った。

act..03 青空の下で

「じゃん！　ここだよ」

「じゃあ、カリマは先に行つて。私達は後から行くから」

移動用ワークボットからカリマは飛び降り、たたと駆けっていく。砂ぼこりが巻き上がる、砂漠の端。

赤い岩肌に添いながら、だんだんと高くなる村の入り口が其処にはあった。

小さな村だと勝手に想像していたが、思ったよりも規模が大きいうのだ。

あとで、村の名前を聞き、場所を把握しなければ。

先ほど手に入れた情報に誤りがないことを確認しなければならぬ。いい。

屈強な男が二人、大きな門を守護しているのが見えた。

そして、カリマは男たちに手を振りながら、通っていくのが見える。

「私たちも行こう。ナナは俯いて立っているだけでいいから」

ナフィスが笑顔でこちらを見る。

ナフィスがそういうのなら、大丈夫なのだろう。

帝国では、連合王国、特に王国民に対する差別が厳しいと聞くが、彼女の言葉を信じることにしよう。ここで騒ぎを起こして、彼女に迷惑をかける訳にはいかない。

「止まれ！ 顔を上げろ」

「こいつ……、王国人の顔だっ！」

「長老様に報告を！」

……約束が違う。

私はナフィスのいう通りの注意事項を守っていたつもりだ。

ローブのフードを深くかぶり、俯いて、彼女の後ろを歩いていた、はずだ。

私はナフィスの顔を伺い、太ももに（当たる部位）手を当てる。
何かあれば、ここから合金の太刀を抜き出せる。

「違うって。彼は私の親戚の、ゼタ。こういった顔で誤解されてばかりなんだけど、こいつは生粋の帝国民さ。あたしが保証する」

ナフィスのは笑いながら、彼らに近寄り、私の右手を掴んだ。

——待って。

彼女の意味が分かる気がした。不思議な感触だ。

以前までの私は、人間の言葉が命令であり、それ以外に従うすべは無かった。

彼女がパイロットではなく、またそういった、人物と今まで行動を共にしたことがなかったからかもしれない。

いや、違う。

私のAIが彼女の表情や、現在置かれている環境から、彼女の思いを類推しただけだろう。

ようするに、私にプログラミングされていた正義のアーマード・ガジェットとしての行動である、と今は結論づけることとする。

我々に「感情」というプログラムが渡された。

俗にいう、エモーショナルシステムだ。

しかしそれは本当に感情であるのか、私は疑問に感じる。

私はこのように、ナフィスが望むような行動をとっただけである。

それが、本当に「感情」的な行動なのだろうか。

以前より埋め込まれていた、プログラミングによる行動ではないのだろうか。

「ナフィス、我々だって疑いたくない。しかし……」

男達は困ったような顔を見せた。

砂除けのマスクで声がこもっているように聞こえる。

「お願い、彼は悪い奴じゃない。……これで。娘さんの学費に役立てて、ね？」

ナフィスはツナギのポケットから何枚かの紙幣を握らせた。

帝国の通貨、ドログアだ。かなりの高額紙幣のように見える。

このような辺鄙^{へんぴ}な村では、かなりの額になるだろう。

彼女がなぜこのような紙幣を持っているかは、大いなる謎だが。

「しかし！」

「これでどうだ！ もってけ泥棒！」

反対側のポケットから、同じ量程の紙幣を取り出し、男に無理やり握らせた。

そして、ナフィスは掴んだ右手を急にひっぱり、男たちの制止を無視して村へと私を連れて走りだした。

彼女は、あははと笑いながら、村の奥へ全速力で進んでいく。

いわゆる、逃亡、というやつだ。

よくない行動だ、と思った。

本来なら、私が「連合王国同盟軍所属のアーマード・ガジェットだ。訳あって、この地に不時着し……」と宣言しなければならない。しかし、ここは敵国であることなどから判断すると、このままナフィスの親戚として行動するのが正解である、と私は結論付けた。

頭の奥、A Iの奥にピリリと痛みが走って、思考をやめる。

なぜ、ここにいるのかさえ思い出せない自分に、自分がこれ以上思い出すな、と鍵を掛ける。

アーマード・ガジェットとして、何も出来ていない自分に、何も思い出せないことで自分が正当化しているように感じていた。

私は何をすべきなのか。

こういうことを、はがゆい、と思うのだと思った。

※

「偽札作っておいてよかったー！ 私が賄賂なんか持つてるかよ、

バーカ!!」

彼女は、この村を一望できる岩山の展望台へと私をひっぱってき
た。

「誰にやる金も持ってねえーぞ!」

そして、息も絶え絶えに叫んでいた。

全速力でここまで駆け上がったきたのだろう。

私は連れられるままについてきたが、彼女の手はとても温かい。

「ナフィス、やはり不正をするのはよくない。私は外で」

「ナナ、聞こえてた?」

へへへ、と意地悪そうに笑う。

彼女は呼吸を整えて、言葉を繋げる。

「どう? この景色。やっぱり、何処とも代わり映えしない?」

彼女が両手を広げ、空を指さす。

私の目の前には砂漠と空が半分ずつ、世界を分けるように広がっ
ていた。

赤い岩肌に、干し煉瓦の家々、白い日除け布。

青い空に白い雲が走り、砂塵を巻き上げる熱風が頬を撫でる。
ナフィスは静かに私のフードをとった。

「ナナはきつと外を知らない。生まれてからずっと、基地の中でプログラム兵と戦い、知識を詰め込む毎日だった、そうでしょ？」

自分が基地でどのような生活を送っていたか知らないが、このような経験は知らなかった。

知識として、『青空』や『砂漠』を知っていたが、砂漠に吹く風がこんなに温かいことや、砂漠を照らす日光がここまで厳しいこと、青い空を飛ぶ鳥たちの羽音の心地よいことは、ここで初めて知った。

そして、人間の手がここまで温かいことも。

「……それだけじゃあ駄目なんだ」

彼女は苦しそうに息を吐く。

よっぽど先ほど全速力が堪えたようである。

彼女の目は空と砂漠の境界を見つめる。

「私達、帝国の民の生活を、空気を感じて欲しい。せっかくいいAIを積んでもらっているんだ。何事も経験、経験！」

経験……？

本当にそれが彼女の目的なのだろうか。

ここまで危険な賭けをして、私を村まで連れてきた理由がそのような物で終わるのだろうか。

私はそうは思わない。

彼女には恩はある。しかし、それとこれは別問題ではないだろうか。

「……私はナフィスには感謝している。ここまで直して貰い、動くまでになった。

しかし……、貴女は私の剣先を鈍らせようとしているのか？

私は帝国の敵だ。敵国の兵だ。私はこの村を破壊する存在かもしれないのだぞ？」

私は、兵器だ。

彼女もそうだと認識しているだろうし、それだけは変わらない事実だ。

私がここを攻撃するかもしれないのだから。

人間の命令一つで、私はこの村を火の海にすることさえできる。

それが、私なのだから。

彼女は村を見下ろし、呟く。

「貴女が攻撃する国にも、生活があることを忘れないで欲しかった。

ただそれだけ」

彼女の狙いが、見えない。

彼女は私に何を望んでいるのだろうか。

私は彼女の望む答えを出来ているのだろうか。

私は何か間違ったことを言っていないだろうか。

「貴方達にとって私らなんて、取るに足らない虫けらのような存在かもしれない。
だけど、私達帝国の貧民だって必死に生きている。それだけを知って欲しかった」

「わ、私は虫けらなど――」

私は慌てて言葉を挟む。

ナフィスをそのように思ったことはない、訂正しなければ無作法だ。

「……そう。じゃあ、ナナとは仲良くなれる！……かもね！」

ナフィスはペロつと舌を出し笑う。

彼女の何かにはめられた気がしないでもない。

彼女は意地悪な人だ。

答えや目的を言わない。

今の問答においても、

何を、どんな答えを私に求めているのかさえも、彼女は言わない。

だから、私はどうしたらいいのかわからなくなる。

私は、人間ではないから、わからなくなる――。

「市場見に行く？　それからジイちゃんどこ行こう」

ジイちゃん、という方はこの長老で、カリマの祖父であること。そして、ナフィスを受け入れてくれた稀有な人物らしいので、ナフィスは頼りにしている、ということ、らしい。

なぜ、ナフィスを受け入れることが、珍しいのか。よくわからないが懐の深い人のように、私は感じた。

アーマードギミックやガジェットにも詳しい人らしいので、会ってみればこれから役立つことを教えてのでは、とナフィスは言う。

特に私には反対する理由もないので、その申し出に頷いた。

「あーそうだそうだ。絶対私から離れないで、はぐれたらここ集合。手は繋がなくて大丈夫だよね」

「あ、ああ」

「それじゃあ、出発」

ナフィスは楽しそうに笑い、防塵用だと言うマスクを付けた。

a c t . 0 3 青空の下で（後書き）

ちよっと他ページより少なかったかもです。
追加あるかしんないです。

かもかもすいません。

act..04 嘘と優しさ

「凄い人だ」

私の視覚センサーは右往左往し、道行く人達を捉える。

褐色の肌の人々が、砂漠特有の生き物を連れて歩いたり、甘酸っぱい乾燥地帯特有のフルーツが所狭し並べてあったり、この地域の特産品の毛織物の叩き売りが行われていた。

ざわざわと賑わい、肩と肩とがぶつかり合いそうなほど、人が密集している。

ようするに、ここは交易の小さな中継地らしい。

この村周辺の特産品が集められ、人々が各々の欲しいものを手に入れる。

そんな場所だ。

「今日は一番大きな市が立つ日なの。凄いでしょ」

ナフィスが自慢げに、この市場の紹介を始める。

ここに市が初めて立ったのは、300年前、ここにある真っ白な時計台はその時に天から降ってきたもの（真偽は不明だが）で、この通りのシンボルらしい。

ここの屋台の傷跡は、帝国の名将軍、バルク・ブライトが酔った勢いで切りつけてしまったらしく、今でも笑い話になっているという。

ここのれんが造りの水飲み場は以前は、温泉で商人たちが身体を休めていたとか――。

ナフィスは、ペラペラと紹介しながら市場を歩く。そして時折足を止め、珍しい物品を手に取り、私に質問をしてきた。

と、突然。ナフィスが妖^{あや}しげな香りのする香水を手にとり、ふいに私に吹きかけた。

どう思いか尋ねられたので、鼻につくと答えたら、ナフィスは大笑いした。

「鼻なんて、……ないのにつ！ 『鼻につく』だってっ！」

「わ、私はただ意見を求められたので、正直に答えたのであって……」

ナフィスのいう通りである。

私にはカプセルという人型は存在しているが、あくまで器であつて、人間のように嗅覚器は鼻にはない。

耳にある、ナフィス曰くヘッドホンのようなもの、で外界の感覚を受容している。

ただ、そこまで笑うような話ではない、と私は思う。

「しかも、香水を真正面からしかめっ面で『鼻につく』なんて言われたら、女の子泣いちゃうっ」

「では、なんと答えたら？ ナフィスはなんと答えて欲しかったんです？」

ナフィスは香水を元あった位置に戻し、商店主に頭を下げてから

その場を後にした。

そして狭い商店街を抜けると、少し広い噴水広場に出た。
ナフィスは防塵マスクを外し、うーん、と伸びをする。

「え、普通に『いいんじゃない?』とか、『いい香りだね』とかあ、
優しく」

「でもそれは嘘だ」

あら、とナフィスが笑うのをやめた。

そして意味ありげに私に近寄り、顔をのぞき込む。

「詳しく聞きたいな、ナナの言い分」

そして彼女は口角をあげた。

「わ、私はナフィスに『褒めて欲しい』とは言われてません。そして客観的な立場から私の意見を述べたまでです」

「まあ、そーなんだけどねー。世の中必要なんだよね、”優しい嘘”って」

「しかしそれは真実ではない」

ふーん、とナフィスは指を顎に押し当て、空を見る。

私も視線を上げ、空を見る。からりと、青い。

「じゃあさ、じゃあさ。『会うたび私のこと愛してるって言うてえ』

という、あんなおっさんみたいなパイロットがいたらどうすんの？」

不意に、ナフィスは日陰で休む商隊キャラバンの男性が指さしながら、私に尋ねた。

褐色の肌に、恰幅かつぶくがよく口髭を蓄えており、動物に水を飲ませている。

「言います。パイロットの命令だから」

「真実じゃないじゃん」

「私が愛します。だから真実です」

”愛する”ということは、相手を慕い、慈しむこと。

私はそう認識している。パイロットは尊敬するし、私にとって第一である。

そう、プログラミングされているから。

誤りではない。

それに、異性や同性など我々には余り関係のないことである。

私はひとまず、「男」という外見を与えられているが、余り深く考えたことはない。

そしてこれからも考えることはないだろう。

「『私、きれい？』って、あんな犬みたいなパイロットに言われた

ら？」

「これは、『きれいだ』という答えを期待している問いなので、勿論言います。世界中の美しい人の基準と比較し、良い点を列挙します。『鼻筋が凄く良くて、肌の張りも素晴らしいです』と」

「……ナナはやっぱりお堅いわ。なんか冷たいわ」

冷たい。

よくわからない。

私は、そこらへんにいる家庭用ワークボットと異なり、高性能なAI、更にはエモーショナルシステムまで搭載されている。私は家庭用に販売されている者とは一線を画すような、思考や感情表現が出来ると自負している。

なにより、嘘についてはいない。

「嘘——虚偽行為は重大な過失だと、私は心得ていますので」

「必要だと思うけどなあ、嘘……」

ナフィスがうーんと唸る。

私が嘘つきだからかなあ、と笑ってもいた。

ナフィスが何を考え、何を悩んでいるのか、そして何故笑ったのか、私は推し量ることができない。

嘘は正しくない。

だから誤りである。

これに、間違いがあるはずもない。

私は誰よりも正しくなくてはならない。

私は力を持っている。

だからこそ、誰よりも正しく、誰よりも従順で、誰よりも国の為に正義を貫かなければならない。

わかった、とナフィスが手を叩き、私の前に立つ。

「ナナには、”優しさ”が足りない」

「……”優しさ”、ですか？」

優しさ。情が深い、ということ。

誰かを思いやり、好感を与えること。

私に足りないのが、優しさ。

彼女はそういうが、理解はできそうもない。

私は兵器なのだから。

兵器に優しさなどいらぬ。

彼女はやはり私の剣先を鈍らそうとしているだけなのかもしれない。

私はナフィスの顔を見る。

風が彼女の短い髪をなぞり、揺れた。

「そ。ナナの言葉は形だけの”優しさ”で、中身は無機質なんだよね。

ナナは誰も思いやってないし、誰のことも考えてない。

ただ飛んできた言葉に最善の答えを弾き出して、もくもくと返しているだけ。それは全然感情的じゃない」

無機質と言われて、少し寂しくなる。

多分、寂しくなる、という感情であると思う。

私は人間らしく振る舞えるように訓練してきた。

私は人間を困らせない為にも、最善の答えを出すよう努力はしてきた。

そして、人間の求めるものを、ことを、確実にこなしてきたはずだ。

それは、人間に対して本当に良かったことなのだろうか。

私の中に、一つの疑問が生まれた。

ナフィスは、私の動作に迷いを生じさせる。

これは一種のウイルスではないだろうか。

「私は馬鹿だし、ナナの頭ん中はよくわかんない。

だけど！ もっとさあ、楽しめばいいのに。笑えば、もっともつと楽しくなるよ！」

ナフィスが急に私の両頬に手を伸ばす。

「笑ってみて、ナナ」

そして、彼女の手袋が私の頬を掴み、外側に向かって引っ張りだした。

『ワラ ッ テ ミテ．．．』

突然、何かの音声が再生された。

擦れた音声が、身体の遠くから、聞こえる。

脳内が、身体が、動きが、震える。

記録分野に残された、過去の断片か。

それとも、メモリロックが外れかかっているのか。

しかし。

不思議と何も怖くない。

これは、すでにウイルスに完全に感染してしまったのだろうか。
すぐに何かを対策するべきなのに、身体が動かない。

動きたくない。

ずっと、彼女のそばにいたい。

もっと彼女から学びたい。学びとりたい。
もっと、もっと。

私は彼女に、人間に近付きたい――。

「いたい、ナフィス。痛いです」

「じゃあ、笑ってみてよ」

ナフィスは手を離し、歩き始める。

「ナフィス」

私は彼女に言われた通りに笑みを作ってみた。

感情表現の基本として、すでにいくつかのパターンさえ持っている。

それを適切に用いることが、私にとって難しい。

ナフィスは振り向き、私を見ると、顔をどんどん赤くさせていった。

そして。

「……。い、いいんだけど、違う！　ち、違うけど、違うんだけど！　ナナのばーかぁ！！」

と捨て台詞のように私に言葉を投げつけて、走り去っていった。まった。

まばらにいた人々が私を凝視する。

噴水広場には、私とザワザワとした話し声が残るだけになってしまった。

「ナフィス？」

何かまた間違ってしまったらしい。
また彼女に謝らなければならない。

私は一息をつくと彼女を追って、ひとり人通りの多い路地へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2488y/>

possession

2011年11月20日23時26分発行